Kappa Novels

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども お書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社 出版局

長編推理小説 **病院坂の首縊りの家** ¥720

昭和54年4月30日 初版1刷発行

著者 横溝正史
東京都世田谷区成城1-23-4

発行者 小保方宇三郎

印刷者 鈴木貞三郎
東京都文京区水道1-2-1
公和印刷

発行所 東京都文京区音羽2
振替 東京 6-115347
株式会社 光文社
電話 東京 (942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 (明泉堂製本)
表紙の模様・意匠登録 116613
© Seisi Yokomizo 1979
(分)0-2-93(製)02369(出)2271(0)
Printed in Japan

Kappa Novels

病院坂の首縊りの家　目次

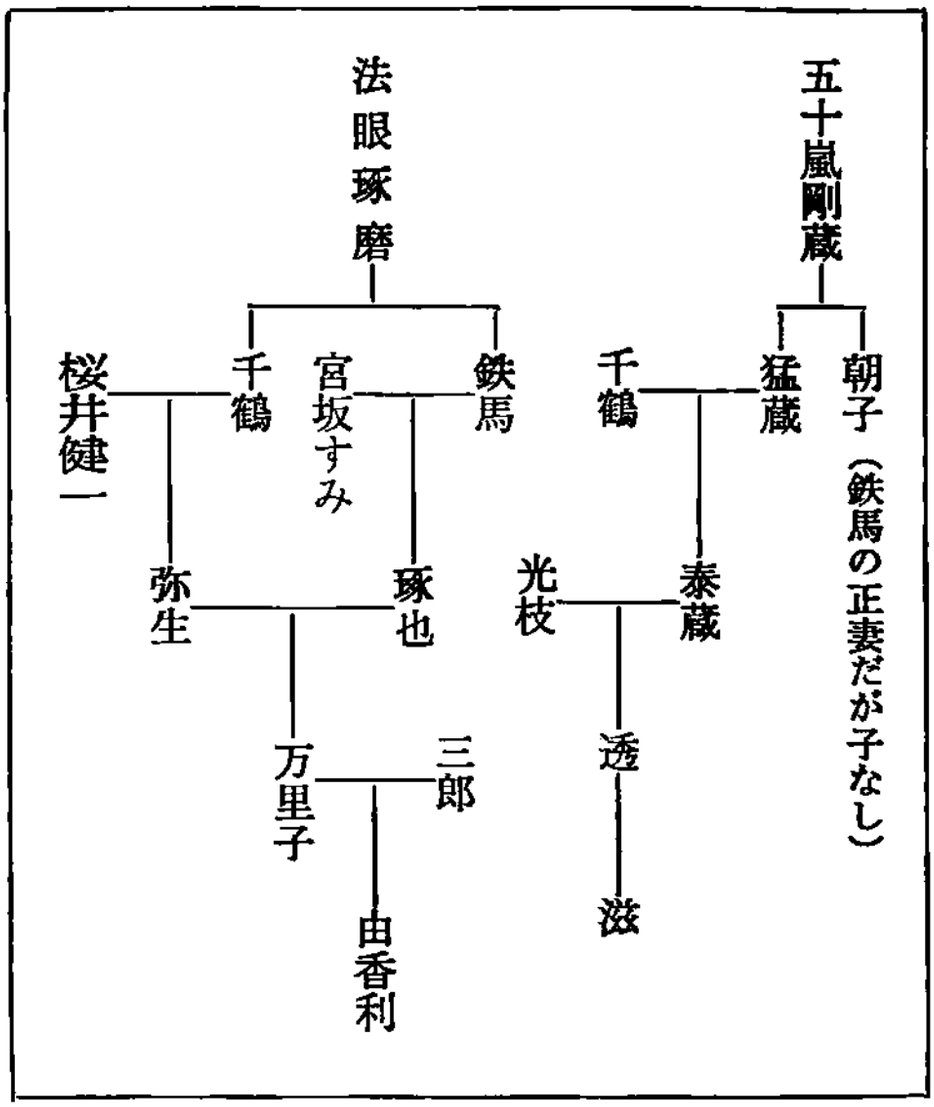
序詞　港区大変貌のこと
砧の隠居独白のこと……7
第一部　輪廻の章……13
第一編　法眼鉄馬とその一族のこと
法眼・五十嵐、三重の縁のこと……14
第二編　芝高輪本條写真館のこと
風鈴のある結婚風景のこと……27
第三編　法眼弥生は片眼が偽眼であること
天竺浪人という名の詩人のこと……60
第四編　耕助首縊りの家を探検すること
蛆虫を嚙みしめる美少女のこと……86

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第五編　ジャズ・コンボ「怒れる海賊たち」のこと
本條直吉ふたたび風鈴を撮影すること　……101
暗中模索の章　……149
第二部　転生の章　……237
第一編　大恐喝者本條徳兵衛のこと
耕助不吉な予感に戦くこと　……238
第二編　直吉二度の奇禍に怯えること
耕助鉄の小函を譲られること　……250
第三編　関根美穂冒険を決意すること
法眼弥生心臓発作に悩むこと　……265
第四編　本條直吉連日酒びたりのこと
「怒れる海賊たち」同窓会のこと　……286

第五編　同窓五人の転生ぶりのこと
呪詛を吐く幻燈写真のこと……307
第六編　耕助・弥生奇妙な対面のこと
金田一耕助爆弾を投げること……338
第七編　矢継ぎ早の殺人事件のこと
鉄也・美穂イニシアルのこと……361
第八編　本條会館「温故知新館」のこと
「怒れる海賊たち」恐怖に戦くこと……393
第九編　耕助愚者の犯罪を説くこと
愚者犯罪計画に熱中すること……407
第十編　愚者耕助の罠に落ちること
耕助・弥生最後の対決のこと……451
拾遺……485

法眼家・五十嵐家の系譜



本文さし絵
三井永一（みついえいいち）

序詞

港区大変貌のこと
砧の隠居独白のこと

いま私の机上には東京都区分詳細図、全二十三区のうち港区の地図が二葉ならんでいる。古いほうは昭和二十八年に発行されたもの、新しいほうはおなじ地図出版社から発行された、昭和四十八年度版によるものである。

この二葉の地図を比較してみると、戦前から戦後、さらに戦後から現代へかけての東京都の変貌が、いかに激しいものであるかが一目瞭然である。だいいち戦前には港区などという区はなかったように思う。私の記憶がもうひとつ定かでないのだけれど、そこに編入されている赤坂××町や麻布××町、芝××町などというのは、戦前それぞれ独立して、赤坂区、麻布区、芝区と呼ばれていたのではないか。

私は大正十五年、即ちのちの昭和元年に上京してきて、それ以来、九年から十四年までの信州上諏訪における闘病生活時代、二十年から二十三年へかけての岡山県への疎開時代をのぞいては、引きつづき東京都に住んでいるのだが、昔の赤坂、麻布、芝方面へかけての知識はまことに浅かった。それというのが上京以来私の勤めていた出版社は小石川にあり、その縁で私も小石川からのちに闘病生活に入るまで吉祥寺に住んでいたので、現在の港区方面は私にとっていたって無縁の土地であった。神戸生まれで神戸育ちの私にとって、東京という都市はあまりにも広過ぎたのだ。

だから戦前私の持っていたその方面に関する知識といえば、赤坂は軍人相手の花柳界のあるところ、麻布といえば練兵場、芝といえば高輪の泉岳寺くらいのものだが、私は七十三歳になるこの年まで、いまだに泉岳寺さえしらないくらいだから、広い東京でもこれほど私にとって縁のない土地も少ないだろう。

だが、私がなぜこのようなことをくだくだしく書いているかといえば、これからお話しようとしている、あの世にもおぞましき事件の舞台となった、いわゆる「首縊りの家」のある病院坂というのは、麻布と芝との境目にあたっているからである。その辺はやたらに坂の多いところで、いま眼のまえに並んでいる二枚の地図をみても、魚籃坂とか伊皿子坂、名光坂とか三光坂、蜀江坂。義士

外伝で有名な南部坂雪の別れの南部坂なども、ほど遠からぬところにあるらしい。ほかに仙台坂、明治坂、新坂、奴坂、狸坂等々々、枚挙にいとまあらずだが、なかには暗闇坂などという物騒な名前の坂もある。

私がこれからお話しようとしている問題の坂は魚籃坂のちかくにあり、この坂にも江戸時代から呼びならわされた、由緒正しき名前があるのだけれど、坂の途中に大きな病院があるところから、いつのほどよりか病院坂と呼ばれるようになっていたので、私もこのまがまがしい物語のなかではその名を踏襲することにする。その病院こそはこの物語のなかで、大きなウエイトを占めているのだから。

いったい病院坂という名はあちこちにあるらしく、げんに私がいま住んでいる成城の町にもおなじ名の坂がある。しかも、成城の病院坂は坂の名の由来となった病院が、いまや跡形もなくなっているのに反して、これからお話しようとしている病院坂には、いまもなおその坂の名のいわれとなった、法眼病院という大きな総合病院が繁栄しており、昭和四十八年度版の地図にはその名が記入されているくらいである。

それにしても、これは東京都の他の二十二区にもいえることだが、いま二枚の地図を比較してみるに、なんという大きな変貌がそこに看取できることだろう。だいいち町の名前からしてずいぶん変わってしまったものだ。

なるほどこうして町名を整理し、区画を整備していくと、郵便物の配達などには便利なのだろうが、いたって懐古趣味的な私には、古い由緒ある地名が、つぎからつぎへと消えていくのが惜しまれてならぬ。

それにまた道路の広くなったのはどうだろう。そういえば昭和二十八年の地図でみると、復興計画路線と称して、いたるところに三十メートル、五十メートルの予定路線が点線で示してあり、それは町であろうが、墓地であろうが、公園であろうが、遠慮容赦もなく引き裂き、引きちぎっている。なるほどこうしたほうが合理的であり、万一有事のさいの避難手段になるのかもしれないけれど、町というものが成立しているには、それ相当の事由がなければならぬ。それをこう情け容赦もなく分断するのはどうであろうかと、いつか心の寒くなる思いをしたことがあるが、いま四十八年の地図でみると、それらの予定路線は大半実現しているらしい。ここいらに日本人の旺盛なエネルギーを窺い知ることができるのかもしれないが、さて立ち退きを命じられたひとびとはその後

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

どこへいったのか。またこの広い道路の沿道に住むひとたちの生活は、果たして快適といえるだろうか。

さらに二十八年の地図と現代のそれを比較してみて気がつくことは、路面電車が姿を消して、地下鉄が縦横に走っているらしいこと、それと新幹線と東京タワーとモノレールの出現である。新幹線はいまや日本の誇りになっているらしいし、東京タワーは東京名物である。地方に住んでいる私の孫は、上京してくるとわざわざモノレールに乗りにいくのである。すべては戦後三十年におけるわが国の驚異的発展の象徴かもしれないけれど、年老いて、万事につけて退嬰的になり、みずから砧の隠居と称している私にとっては、あの虚しい高度成長の落とし子としか思えない。

それにしても私がなぜ昭和二十八年の地図と、現代のそれを比較してお眼にかけたかというと、これからお話しようとしているこの恐ろしい物語は、じつに昭和二十八年の八月二十八日にはじまって、昭和四十八年の四月三十日に、やっと解決したという、金田一耕助の扱った事件としては、他に類を見ないほど長年月を要した事件なのである。その間じつに十九年と八か月、金田一耕助の手腕をもってしても、それだけ長い歳月を必要としたのは、それはそれなりの事情があったにせよ、これは世にも驚くべき事件であった。

こういう書きかたをすると、また金田一耕助に叱られるかもしれない。私はいつかかれからこういう注意をうけたことがある。ついでにいっておくが、いま私の住んでいる成城という町は、昔砧村とよばれていたそうな。そこでいたって懐古趣味的である私は、自分のことを砧の隠居とよんでいるのだが、そういう私をつかまえて、かれは成城の先生とよぶのである。

「先生は私の功名談をお書きになるとき、よく発端とか大団円とかいうことばをお使いになる。発端ということばはまだよいとして、大団円というのはどうでしょうか。私はその文章を拝見するたびに、いつも抵抗を感じずにはいられないのです。大団円ということばは終局を意味しています。わたしの扱った事件に関するかぎり、わたしの解決がまちがっていたとは思えない。しかし、それだからってすべてが終わったとも思えないのです。よく始めあれば終わりありといいますが、わたしはそのことばを信じない。事件そのものは解決しても、その瞬間、そこからまた新しいドラマが出発するのではないかと思うと、わたしはいつも不安でもあり、怖くてたまらなく

なることがあるんですよ」
金田一耕助は暗い眼をして、いつか私にこう訴えたことがある。
私は私でかれの功名談を記録にのこすとき、つぎのようなことばをよく使っている。
「かれの脳細胞のなかで事件が解決にちかづいたとき、金田一耕助は、救いようのない孤独の影におおわれていく」と。
おそらくかれは事件そのものは解決しても、それですべてが終わったのではないということを知っているのだろう。いや、それのみならず、そこからまた新しいドラマ、かれが解決した事件よりもっと恐ろしい事件が、展開していくのではないかということを怖れているのだろう。
これからお話しようとしている「病院坂の首縊りの家」の事件などまさにそのいい例なのだ。昭和二十八年の夏にはじまったこの事件は、十九年八か月という長い歳月を経て昭和四十八年の四月三十日に解決をみたと思われているのだが、果たしてそれですべてが終わったのであろうか。二度あることは三度あるとよくいうが、そこからまた恐ろしい血みどろの事件が進展していくのではないかと思えば、私はいまこうして筆を執っていても、背筋が寒くなるような戦慄を禁じることができないのである。
閑話休題。
それではいよいよこのおぞましき事件にむかって筆を進めようと思うのだが、そのまえにどうしても紹介しておかなければならないのは、この事件の中心となった法眼病院の創始者、法眼鉄馬とその一族に関する記録である。
これはもちろん昭和二十八年の夏に起こった、あの世にも奇妙な事件の調査に着手するに当たって、金田一耕助が作成しておいた調査資料にもとづくものだが、金田一耕助のそれがそうとう厖大なものであったのを、私が適当に圧縮して、この物語に必要と思われる事実だけにダイジェストしたものである。

第一部　輪廻（りんね）の章

第一編

法眼鉄馬とその一族のこと

法眼・五十嵐、三重の縁のこと

一

法眼鉄馬、文久二年東北のさる大藩の典医、法眼琢磨の長子としてうまれ、幼名を銀之助といったという。たったひとりの妹に千鶴というのがあり、明治三年うまれだというから、銀之助より八つ年下だったが、銀之助とは母を異にしていたという。

さて銀之助だが、明治五年父琢磨にともなわれて上京、本郷の進文学舎にはいりドイツ語を学んだ。いまにして思えば当時は文明開化の声がさかんな時代であった。おそらく琢磨はおのれの倅をもって、父祖伝来の家業を継がせようと思ったのだろうが、自分がうけた教育では、いまや新時代に通用しなくなっていることをしっていたのであろう。その点に関して鉄馬は終生父の恩を肝に銘じていたという。しかもかれもまたよく父の期待にこたえたのである。明治十年、十六歳にして東京大学医学校の本科生となったというのだから、いかに早熟な時代だったとはいえ、やはり栴檀は双葉より芳しかったというべきであろう。

さて、十六歳といえば昔の元服である。銀之助は医科大学の本科生となると、父に請うて鉄馬と改名することを許された。それからのちの法眼鉄馬は文字どおり、秀才という名を地でいったようなものである。十四年、二十歳で学校を出ると陸軍軍医となり、十七年、二十三歳にしてお定まりのドイツ留学、ライプチヒ、ドレスデン、ミュンヘン等に学び、二十年にベルリン大学へ入ったが、翌年帰朝、軍医学校教官に任ぜられ、かたわら陸軍大学の教官をかねた。ときに二十七歳、二十四年には医学博士の称号をえているが、その年に父琢磨をうしなっている。おそらくかれはわが子の俊才ぶりに満足して眼を瞑ったことだろう。かれは九段で医家として開業し、かなり流行する医者だったそうだが、倅鉄馬の謹直いっぽうの性格なのに反して、豪放磊落をとおしこして、奔放逸脱の気味があり、つきあいなどにもそうとういかがわし

い人物が多く、そのことが父を尊敬することあまりにも深かった鉄馬のうえに、黒い影を落としたのであろうといわれている。

さて鉄馬のほうだがその後も順調に出世街道を突っ走った。いってみればこのひとは明治医学界の先覚者でもあり、先駆者でもあった。巷間伝うるところによると、このひとは当然軍医総監になるものとばかり思い込まれていたそうだが、そこにどういう事情があったのか、明治四十年とつぜん職を辞し、それからまもなく現在の場所に法眼病院を設立した。ときに明治四十二年、法眼鉄馬四十八歳であったという。

軍医総監を目前にして、かれがなぜ陸軍から身を退かねばならなかったのか、その間の事情は詳らかでないが、巷間ひそかに伝うるところによると、日露戦争当時陸軍に納入された医療物資について、不正が発覚したのだろうといわれている。つまり、いまのことばでいえば汚職の中心人物と目され、周囲からよってたかって詰め腹を切らされたのだろうといわれているが、しかし、こと軍の威信にかかわることだから、結局事件はヤミからヤミへと葬られ、法的な刑事事件の犠牲者はひとりも出なかった。だから法眼鉄馬ひとりが貧乏クジをひいて、この疑獄は幕を閉じたのだといわれている。

しかし、この事件に関する限り、法眼鉄馬に責任なしとはいえなかった。

それよりさき、法眼鉄馬は二十一年に帰朝するとまもなく結婚している。妻の朝子は鉄馬の父琢磨の盟友五十嵐剛蔵の娘で、この結婚はもちろん琢磨の強く希望するところであった。

さて、鉄馬の舅となった五十嵐剛蔵なる人物だが、琢磨と同郷の出身で年齢もおっつかっつ、明治の初年に琢磨と相前後して東京へ出てくると、どこからどういうつてを求めたのか、要路の大官にとりいり、当時押しも押されもせぬ政商にのしあがっていた。したがってずいぶんアクの強い人物だったらしく、鉄馬としてはそういう人物と婿舅の縁を結ぶことには、あまり気がすすまなかったらしいのだが、父に強要されるとあえて反対することはできなかったらしい。琢磨としてはどちらかといえば学究肌の倅に、こういうアクの強い、生活力の旺盛な後ろ楯をつけておきたかったというのも、無理からぬ親心だったかもしれないが、あとから思えばそのことが、法眼一家に暗い影をおとしはじめたのである。

さて、鉄馬の妻となった朝子だが、これは毒にも薬に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com